現代英語の be about to に関する意味論的研究 *

佐　藤　健　児

1. はじめに

「かたちが違えば意味が異なる。意味が違えばかたちが異なる」（Bolinger（1977：x））―ことばの世界の大原則である。では，ともに近接未来を表わすとされる be about to と be going to とでは，どのように意味が異なるのであろうか。例えば，次の（1）のような例における容認性判断の違いは，いったい，どのように説明されるべきであろうか。

（1）Message printed on hot beverage cup sleeves:
Caution: The beverage you { ***are about to*** / ?***are going to*** } enjoy is extremely hot.　（Strauss et al.（2018：245））

* 本稿は日本大学英文学会2018年度学術研究発表会（2018年12月８日（土），日本大学文理学部）および六甲英語学研究会2018年12月例会（2018年12月23日（土），神戸市勤労会館）において口頭発表した原稿に大幅の加筆・修正を施したものである。当日司会をしてくださった黒滝真理子先生，出水孝典先生，発表の準備段階から貴重なご意見をくださった柏野健次先生，吉良文孝先生，保坂道雄先生，和田尚明先生，小澤賢司氏，発表の際に有益なコメントをくださったフロアの先生方，そして，インフォーマントとして協力してくださった Richard Caraker 先生，Myles Chilton 先生，Thomas Lockley 先生，Jonathan Wood 先生にもこの場をお借りして心より感謝申し上げたい。

本稿では，従来，周辺的な未来表現とみなされてきた be about to について，適宜，be going to との比較・対照を織り交ぜながら，その意味的特徴を明らかにしてみたい。

2. Be about to の統語的特徴

本題に入る前に，be about to の統語的特徴について，３点指摘しておきたい。

2.1. Be about to の主語

はじめに，be about to の主語についてみてみよう。次の（2a）の例にみるように，近接未来を表わす表現の中でも，be on the point of は，ふつう，その主語に無生物をとることはできないとされる（Cf. Close（1975：261）；Declerck（1991：116）；鈴木・安井（1994：211）など）。

（２）a. *I feel (that) <u>something terrible</u> ***is on the point of*** happening.

（鈴木・安井（1994：211））

b. I can't see you now. <u>I</u>'***m*** just ***on the point of*** leaving.

（Close（1975：261））

では，be about to の場合はどうであろうか。この点に関しては，Potsuma（1926：245）に以下の記述がみられる。

（３）*To be about* is distinguished from to *be going in*［ママ］that it is less colloquial than the latter and is more distinctly used to express a near or immediate future. <u>Nor is it, apparently, ever used in connexion with the indefinite *it* as the subject. Thus *It is going to rain* could hardly be replaced by *It is about to rain*.</u>

しかし，Potsuma（1926）の記述は少なくとも現代英語の be about to には

当てはまらないようである。次の（4）のような実例が観察されるからである（Cf. 荒木編（1986：271f.））。

（4）There was a fifteen-second pause. While he waited, Tsukuru gazed out the window at the streets of Shinjuku. Thick clouds covered the sky, and it looked like it ***was about to*** rain.

（Haruki Murakami, *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage*）

さらに，次の（5）や（6）の例にみるように，be about to の主語としては，不定の it のみならず，虚辞の there や無生物も生起可能である。

（5）There***'s about to*** be an explosion.　（Long and Long（1971：163））

（6）I feel (that) something terrible ***is about to*** happen.［Cf.（2a）］

（Close（1975：261））

以上の点からも分かるとおり，少なくとも現代英語においては，be about to の主語として生起する名詞句の種類に関して，統語上の制約は存在しない。

2.2. Be about to の統語的ステータス

次に，be about to の統語的ステータスについて考えてみよう。すなわち，be about to を，統語上，次の（7i）と（7ii）のどちらとみなすべきかという問題である[2]。

2　意味的には，*OALD*[10]（s.v. ABOUT）のように，be about to をイディオムとみなすべきか否かが問題となる。*OALD*[10]によれば，イディオム（idiom）とは次のように定義される。

（i）a group of words whose meaning is different from the meanings of the individual words: *'Let the cat out of the bag' is an idiom meaning to tell a secret by mistake.*　（*OALD*[10]（s.v. IDIOM））

本稿では，be about to の表わす意味は，（i）be，（ii）about，（iii）to という個々の単語の意味の総和によって導き出されるものであり，その意味において，イディオムではないという立場をとる（Cf. Yamamoto（2010：83））。

（7）i. Be about to はひとまとまりの機能語である。
ii. Be about to は be + about to という複数の要素からなる複合的な表現である。

（7i）は be about to を be going to と同様，3語で1つの機能語とみなす考え方である。この立場をとる文法家には，例えば，安藤（2005）や石橋編（1966）などがいる。

（8）この about の品詞については，ときに I am about *starting*.（私は出かけようとしているところだ）のように動名詞を伴うこともあるので，OED[2]は ‘on the point of’ という意味の前置詞と解している[3]。一方，OALD[5, 6]や LDCE[3, 4]は形容詞としている。しかし，こういう品詞の詮索はあまり生産的ではなく，いまは文法化が生じて，be about to で近接未来時を指示する機能語になっている，と考えるのが至当であろう。（安藤（2005：110））

一方，Wada（2019）は次の3つの統語的な証拠に基づき，be about to は be going to とは異なり，be + about to という2つの要素から合成的に構成されていると主張する。（7ii）の分析である。

第1に，about to は be 以外のコピュラと共起することが可能である。

（9）a. He remembered that Narcisse’s nose had twitched at the breakfast table and that she ***had seemed about to*** cry.
（Irwin Shaw, *Tip on a Dead Jockey*）（小西編（1989：11））

3　これに対し，be about to は動名詞を伴わないとする文法書・語法書や辞典も存在する。
（i）a. I ***was about*** { ***to get*** / ***getting*** } into the bath when I heard a strange noise.
（Turton（1995：§6））
b. I ***was about*** { ***to leave*** / ***leaving*** } when the telephone rang.
（Heaton and Turton（1987：1））
c. ‘You ***are about*** { ***to cross*** / ***crossing*** } the River Jordan’.
（*CALD*[9]（s.v. ABOUT））

b. She didn't respond. She just held her lips tight. She ***seemed about to*** say something, but it looked like if she did, she would cry.

（Haruki Murakami, *Yesterday*）

(10) … ; while in an early Attic scene, he ***appears about to*** cut off the monster's tongue.　（BNC E87）（Wada（2019：326））

第 2 に，about to は単独で as if 節内に生起することが可能である。

(11) Marc took a step forward ***as if about to*** restrain his younger brother by sheer force, but …　（BNC JXU）（Wada（2019：326））

第 3 に，about to は単独で形容詞的に名詞句を修飾することが可能である。

(12) a. No one could have the slightest foreboding of anything ***about to*** happen.　（江川（1991[3]：318））

b. Passengers ***about to*** depart on flight 26 should proceed to gate 5.

（Comrie（1985：60））

c. He looked like a man ***about to*** faint.

（『リーダーズ英和辞典 第 3 版』（s.v. ABOUT））

d. With drooping head like a prisoner ***about to*** receive his sentence.

（Jespersen（1933：336））

e. a petal ***about to*** fall　（『ジーニアス英和大辞典』（s.v. ABOUT））

(13) His face wore an expression close to ecstasy. He reminded me of a carnivorous raptor ***about to*** launch onto its prey.

（Haruki Murakami, *Killing Commendatore*）

本稿では，Wada（2019）の主張を踏襲しつつ，この分析を支持するさらなる統語的な証拠として，以下の 2 点を挙げる。

第1に，about to は単独で分詞構文内に生起することが可能である。

(14) a. It was dinnertime. People were with their families at the dinner table, ***about to*** enjoy a hot meal. I could sense that slight warmth in those lights. In contrast, on the other side of the valley, Menshiki, I, and the Commendatore were seated at that large table, ***about to*** begin an eccentric, formal dinner party.

(Haruki Murakami, *Killing Commendatore*)

b. Yet when I looked at Morrie, I wondered if I were in his shoes, ***about to*** die, and I had no family, no children, would the emptiness be unbearable? (Mitch Albom, *Tuesdays with Morrie*)

第2に，about to は単独で疑問文の返答に用いることが可能である。

(15) Ready for bed? — Just ***about to***.

(『リーダーズ英和辞典 第3版』(s.v. ABOUT))

以上の点に加え，本稿では，さらに，be going to の going to (gonna) と同様，be about to においても，about と to の間には統語的な隔たりは存在しないことを指摘しておく。(i) 次の (16) の例に見るように，動詞句削除において，to 不定詞の削除が不可能であること，(ii) about to には bouta という縮約形が存在すること (Cf. 渡辺 (2009：72)) がその証拠である。

(16) *He's keen to leave, but ***isn't about***. [Cf. He's keen to leave, but ***isn't able***.] (Westney (1995：20))

3. Be about to の意味的特徴

次の（17）の例や（18）の記述に見るように，be about to は，一般に，tomorrow や next week などの未来を表わす時の副詞語句とは共起しないとされる（Cf.『ウィズダム英和辞典 第4版』(s.v. ABOUT)；『ユースプログレッシブ英和辞典』(s.v. ABOUT）など）[4]。

（17）a. *It***'s about to** rain this afternoon.　（田中（2017[2]：216））

b. *Doc Brown ***is about to*** leave tomorrow.　（Wada（2000：388））

c. ?He ***is about to*** leave Japan tomorrow.　（安藤・山田編（1995：8））

d *He ***is about to*** leave the town next week.　（Watanabe（2010：354））

e. *Mana ***is about to*** play the *koto* next week.　（Wada（2000：388））

f. *The building ***is about to*** be pulled down next year.（Turton（1995：§6））

g. *We ***are about to*** carry out this project next year.

（木塚・Vardaman 編（1997：52））

4　小西（1976：291），小西編（1989：11），渡辺編（1976：355）などでは，be about to が tomorrow と共起した次の例が挙げられている。「追加表現」（afterthought）としての tomorrow である（コンマに注意）。

（ｉ）He ***is about to*** leave, tomorrow.　（小西（1976：291））

また，『ジーニアス英和辞典 第5版』（s.v. ABOUT）や中邑・山岡・柏野編（2017：89）などでは，例文の記載はないものの，be about to が now と共起可能であることが指摘されている（この点については，5～6節を参照）。

（ii）be about to は be going to よりも差し迫った未来を表し，通例未来を表す副詞（句）を伴わない。ただし，now とともに用いることは可能。

（『ジーニアス英和辞典 第5版』（s.v. ABOUT））

なお，*CAADE*[2]（s.v. ABOUT）は be about to と時の副詞語句の共起そのものを認めていないが，これは誤りである。後の議論に見るように，実際には，be about to が時の副詞語句と共起した例は数多く存在する。

（iii）*About to* is used to say that something is going to happen very soon without specifying exactly when. A time expression is not necessary and should be avoided: *The concert* ***is about to*** *start*. means that it is imminent; *The concert starts in five minutes*. tells us exactly when.　（*CAADE*[2]（s.v. ABOUT））

(18) be going to よりも差し迫った未来を表し，tomorrow，next week のような未来を表す副詞（句）とは通例，用いない。

（『ランダムハウス英和大辞典』（s.v. ABOUT））

事実，手元の用例（Haruki Murakami の長編小説 8 編[5]）を調べてみても，(be) about to と未来を表わす時の副詞語句が共起した例は202例中 2 例のみであった（just，now は除く）[6]。

一方，上の（17）の例を be going to に置き換えた（19）の例はすべて適格である。

(19) a. It***'s going to*** rain this afternoon. （田中（2017[2]：216））

b. Doc Brown ***is going to*** leave tomorrow. （Wada（2000：388））

c. He ***is going to*** leave Japan tomorrow. （安藤・山田編（1995：8））

d. He ***is going to*** leave the town next week. （Watanabe（2010：354））

e. Mana ***is going to*** play the *koto* next week. （Wada（2000：388））

f. The building ***is going to*** be pulled down next year. （Turton（1995：§6））

g. We ***are going to*** carry out this project next year.

（木塚・Vardaman 編（1997：52））

---

5 本稿の調査で使用した Haruki Murakami（村上春樹）の長編小説は以下の 8 編である（いずれも電子書籍）：(i) *Killing Commendatore*（『騎士団長殺し』）；(ii) *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage*（『色彩を持たない田崎つくると，彼の巡礼の年』）；(iii) *1Q84*（『1Q84』）；(iv) *Kafka on the Shore*（『海辺のカフカ』）；(v) *The Wind-up Bird Chronicle*（『ねじまき鳥クロニクル』）；(vi) *Dance Dance Dance*（『ダンス・ダンス・ダンス』）；(vii) *Norwegian Wood*（『ノルウェイの森』）；(viii) *Hard-Boiled Wonderland and the End of the World*（『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』）

6 小西（1976：292）においても，次のようなデータが報告されている（さらに，渡辺編（1976：355f.）も参照）。

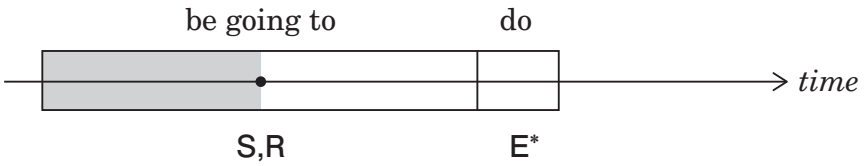
（ｉ）それはともかくとして，実際に，未来の一時点を示す副詞と共に用いられた例はきわめて少なく，たとえば，語法研究家忍甲一氏が報告されるところによると *The New Yorker* に1970年 6 月号から1971年 9 月号までの間に出た *be about to do* についてずばり副詞のつく例は 1 つも見当たらないということである。

同じ近接未来を表わす表現であるとされるにもかかわらず，be going to とは異なり，be about to が，一般には，tomorrow や next week などの未来を表わす時の副詞語句とは共起しないとされるのはなぜであろうか。

4. Be about to の時制構造と本質的意味

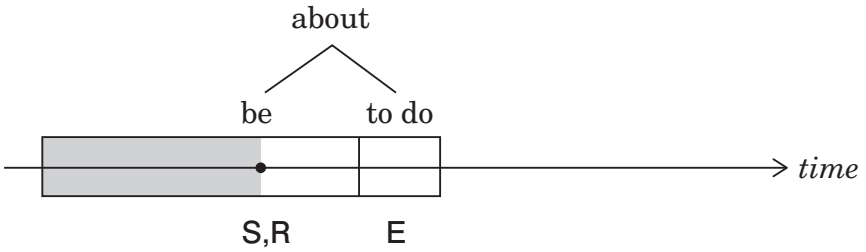
この問題を解決するために，be going to と be about to には，それぞれ，次のような時制構造と本質的意味が備わっているものと想定してみよう（S は発話時（point of Speech），R は基準時（point of Reference），E は出来事時（point of the Event）を指す（Cf. Reichenbach（1947：287ff.））。

(20) a. Be going to の時制構造（現在形）：



*E の時点は時の副詞語句や文脈によって，R（＝S）に近づくことも，R（＝S）から遠ざかることもある。

b. Be about to の時制構造（現在形）：



(21) a. Be going to の本質的意味：

Be going to は，現在の状況（過去形の場合は過去の状況）が基準時（R）において原形不定詞で表わされる未来の状況（E）に向かって進行中であることを表わす。

b. Be about to の本質的意味：

Be about to は，現在の状況（過去形の場合は過去の状況）が基準時（R）において原形不定詞で表わされる未来の状況（E）の周辺にあることを表わす[7]。

このような想定に基づくならば，be going to と be about to は，少なくとも次の２つの点で共通している。

第１に，be going to と be about to には，ともに，基準時以前の状況（＝前段階（意図・徴候））が認められる[8]。このことは，両表現が基準時以前の状況の存在を前提とする副詞である already と共起可能であるという事実によって証明される。

(22) She ***was*** already { ***going*** / ***about*** } ***to*** tell us.

（Huddleston and Pullum（2002：212））

第２に，be going to と be about to に後続する原形不定詞で表わされる状況は，ともに，不定詞の to によって，基準時よりも未来（右側）に位置づけられている。このことは，例えば，次の（23）の例において，両表現のパラフレーズに will が用いられていることからも明らかである。

7　柏野編（2010：360）は be about to に（ia）のような根源的意味と（ib）のような認識的意味の２つ意味を認めている。

（ｉ）a. I ***was about to*** leave when I remembered I'd left my wallet in my locker.

b. I think I***'m about to*** faint.

本稿では，これらの意味は，be about to の本質的意味に，主語が有生か無生か（[±animate]），原形不定詞で表わされる状況が自己制御可能な状況か否か（[±self-controllable]）といった要因が加わって導き出されるものであると考える。

8　「前段階」については，拙論（2014）や吉良（2018）などを参照されたい。

(23) a. [Look at those clouds!] There ***is going to*** be a storm in a minute.
(= *'There are signs in the present that there will be a storm soon.'*)
b. [Look at her!] She ***is about to*** faint. (= *'You can see now that she will faint in the very near future.'*)　(a-b: Declerck（2010：274）)

では，両者の相違点はどうであろうか。Bolinger（1977）の言う「かたちと意味の一対一の対応関係の原則」に従えば，両者の意味の違いは，(***be***) ***going*** と ***about*** の意味の違いに求められるはずである。

ここで注目すべきは，「移動」を表わす go の進行形から発達した be going to の場合には[9]，現在の状況が基準時において原形不定詞で表わされる未来の状況に向かって進行中（***be going***）であることが述べられているにすぎず，未来の状況の生起時は必ずしも近い未来に限定されないという点である。もちろん，未来の状況へとつながる現在の状況が進行中である以上，未来の状況が近い未来に生起する可能性は存在する。Be going to が「近接未来」を表わすとされるゆえんである。しかし，そこでの近接性は be going to の本質的意味およびその時制構造から語用論的にもたらされる含意であって，意味論的には「移動（進行）」は必ずしも「近接（immediacy）」を含意しない（例えば，He is going to New York.（彼はニューヨークへ向かっているところだ）という文は，彼がニューヨークのすぐそばまで来ていることを必ずしも含意しない）。事実，以下の（24）の例では，時の副詞表現によって，原形不定詞で表わされる未来の状況が遠い未来に生起することが明示されている。

(24) a. If Winterbottom's calculations are correct, this planet ***is going to*** burn itself out 200,000,000 years from now.［単純未来］
(Leech（2004[3]：60）)
b. What ***are*** you ***going to*** be when you grow up?［意志未来］
(江川（1991[3]：221）)

9　Be going to の文法化については，Hopper and Traugott（2003[2]）を参照されたい。

以上の考察からも分かるとおり，be going to の近接性はその本質的意味および時制構造から醸し出される「語用論的含意（implicature）」であって，「意味論的含意（implication）」ではない（Cf. Wada（2019：334））。ゆえに，be going to は近い未来の状況のみならず，遠い未来の状況にも言及することが可能である。

一方，be about to の場合はどうであろうか。ここでは，次の 2 つの言語事実に基づき，be about to の場合には，about によって時間的近接性（周辺性）が意味論的に含意されているものと想定してみたい。

第 1 に，「移動」を表わす go を含む be going to とは異なり，be about to には「周辺」を原義（基本義）とする about が含まれる。

(25) a. around とほぼ同様に「(…) の周辺に」（↓前 6，副 5）の意が原義で，「(…の) あちこちへ」（↓前 4，副 5），「…の近くに」（↓前 5）を経て，「およそ」（副 1），「…について」（↓前 1）の意や，**be about to** *do*（もうすぐ…する）といった成句で用いられるようになった。around より歴史的に古い語で，around より（(かたく)）響く。

（『ウィズダム英和辞典 第 4 版』（s.v. ABOUT））

b.【基本義：…の周りに。あるものの周辺に位置する】

…の近くに，…のあたりに【位置】（前❸ a））

- …について【関連】（前❶ a））
- およそ【概略】（前❷）
- …しようとしている（前成句 **be about to** do）

（『ジーニアス英和辞典 第 5 版』（s.v. ABOUT））

今，Perkins（1983：72）や Höche（2010：54）などに従って，be going to の going と同様，be about to においても，about が「空間的周辺性（近接性）」の意味から「時間的周辺性（近接性）」の意味へと拡張したと想定するならば，be about to に関して，(20b) の時制構造および (21b) の本質的意味が得られる。

第 2 に，about を含む be about to と about を含まない be to を比較すると，about を含む be about to にのみ，近接性の含意が認められる。例えば，Hewings（2013[3]：254）は次の（26a）と（26b）の例を比較して，about を含む（26b）は「Jonas Fischer 氏がすぐに辞職することを強調する」（‘***is about to*** resign’ emphasises that he will resign very soon）とコメントしている。

（26）a. Jonas Fischer has denied that he ***is to*** resign as marketing manager.

b. Jonas Fischer has denied that he ***is about to*** resign as marketing manager.

以上の 2 点は，be going to とは異なり，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されていることを示すものである。

以上の点を踏まえると，be about to が，一般には，tomorrow や next week などの未来を表わす時の副詞語句とは共起しないとされる理由も自ずと説明される。すなわち，それは，be going to とは異なり，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されており，原形不定詞で表わされる未来の状況が基準時から近い未来に生起することが示されるためと説明される。

なお，冒頭で示した次の例において，be going to の容認度が低いのは，be about to とは異なり，be going to の場合には，原形不定詞で表わされる未来の状況が近い未来に生起する可能性と遠い未来に生起する可能性の 2 つの可能性を秘めているためである。これからすぐにコーヒーを飲む人への注意喚起であれば，後者の可能性は不要である。

（27）Message printed on hot beverage cup sleeves:

Caution: The beverage you { ***are about to*** / ?***are going to*** } enjoy is extremely hot.［＝（1）］

5. さらなる問題

前節までの考察で，be about to が，一般には，未来を表わす時の副詞語句とは共起しないとされる理由が首尾よく説明された。しかし，ことはそれほど単純ではない。なぜなら，以下の（28）～（32）の例に見るように，be about to が未来を表わす時の副詞語句と共起している例が散見されるからである。

(28) a. The water for the spaghetti ***was*** just ***about to*** boil when the telephone rang. (Haruki Murakami, *Dance Dance Dance*)

b. "I'm glad you called," he said. "I ***was*** just ***about to*** call you…." (Haruki Murakami, *Killing Commendatore*)

(29) a. "What I***'m about to*** do now involves a good deal of pain," Aomame said in a voice without inflection. (Haruki Murakami, *1Q84*)

b. "That is the problem which we ***are*** now ***about to*** solve," said Sherlock Holmes. (荒木編（1984：240))

(30) Since he was a child, he had had this big, ugly face, with a misshapen head. His thick lips sagged at the corners and looked as if they ***were about to*** drool at any moment, though they never actually did. (Haruki Murakami, *1Q84*)

(31) a. By the way, that debate, the first one ***is about to*** start in 15 seconds. Don't — don't miss that one. (COCA, spoken, 2016)[10]

b. "I ***am about to*** leave for the station in five minutes, so please explain what you want, quickly." (小西（1976：291))

(32) a. "I ***am about to*** leave for America tomorrow, so I am afraid I cannot see you next week."

10 柏野健次先生提供（2018年12月20日）。

b. “We ***are about to*** leave town next week, so we are very busy packing.”　（a-b: 小西（1976：291））

これらの言語現象をどのように説明すべきか。

6. About の周辺性と相対的・心理的近接性

はじめに，(28)～(31) の例のように，be about to が近い未来を表わす時の副詞語句と共起した例について考えてみよう。先に述べたように，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されている。すると，これらの例のように，be about to にわざわざ now（=“immediately”（Cf. *CALD*[9]（s.v. NOW））や just（=“very soon”（Cf. Quirk et al.（1985：217））などの近い未来を表わす時の副詞語句を付加することは，冗長的（redundant）であるように思われる。では，これらの例では，なぜ，be about to に近い未来を表わす時の副詞語句が付加されているのであろうか。

ここで注意すべきは，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されているとは言うものの，原形不定詞で表わされる未来の状況の生起時については，正確には示されていないという点である。これは，about という語の性質（=周辺性）による。例えば，以下の例を見てみよう。ここでは，about によって「場所的・時間的周辺性」が表わされているが，正確な場所や時間は示されていない。

(33) a. somewhere ***about*** here この辺のどこかに［で］
b. arrive ***about*** midday 正午頃到着する
c. I had breakfast (at) ***about*** 9:00. 9時頃食事をとった
d. He looked ***about*** casually. 彼は何気なくまわりを見た.
（a-d:『ウィズダム英和辞典 第4版』（s.v. ABOUT））

したがって，be about to に近い未来を表わす時の副詞語句が付加されているとすれば，それは，about が表わす近接性を強調したり（Cf.（28）～（30）），原形不定詞で表わされる未来の状況の生起時をより正確に示したりするため（Cf.（31））である。それによって，聞き手（読み手）に対して，be about to のもつ時間的曖昧性を解消することができるからである。特に，（31）のような例においては，“don't miss that one.” や “so please explain what you want, quickly.” などの表現からも察せられるとおり，時間的な情報が重要な役割を果たしている。反対に，時間的近接性に関して曖昧性のない次の（34）のような例には，未来を表わす時の副詞語句を付加する必要はないであろう。

（34）Careful, the beverage you ***are about to*** enjoy is extremely hot.

（Starbucks Coffee のコーヒーカップの注意書き）

次に，（32）の例のように，be about to が遠い未来を表わす時の副詞語句と共起した例について考えてみよう。ここでは，次の（35）の例のように，時の副詞語句とは共起していないものの，be about to が遠い未来の状況に言及している例とあわせて考えてみたい。

（35）I'***m about to*** become a father.

be about to と似た表現に be going to があるが，前者は後者よりも差し迫った事柄について用いられる。例えば，I'***m about to*** become a father. と言えば２，３週間後のことを指すが，I'***m going to*** become a father. と言えば半年後くらいのことを指す。be about to は通例，「まさに…しようとしている」と訳されるが，この例に見られるように必ずしも数分後の事柄を指すわけではないことに注意したい。（柏野編（2010：360））

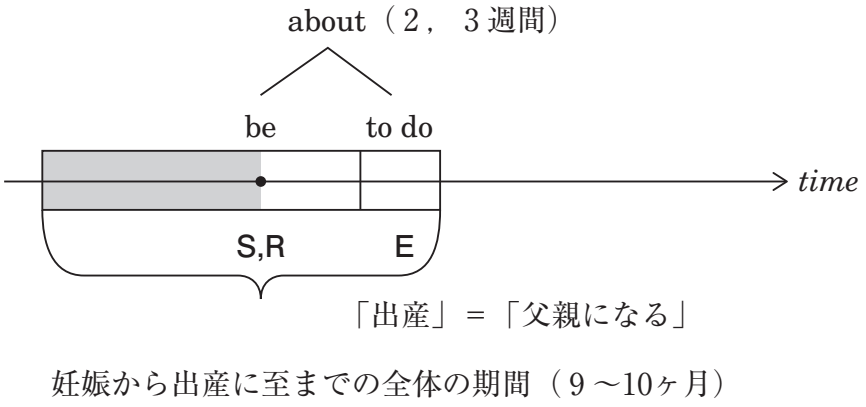
先に述べたように，be about to の場合には，about によって時間的近接性が意味論的に含意されている。すると，これらの例のように，be about to が

遠い未来の状況に言及することは，be about to の時制構造およびその本質的意味とは矛盾するように思われる。では，これらの例では，なぜ，be about to が遠い未来の状況に言及しているのであろうか。

本稿では，この問題に対して，(i) 相対的近接性および (ii) 心理的近接性という観点から，その謎を解き明かしてみたい。

はじめに，(35) の例について考えてみよう。結論的に言えば，ここでの be about to が２，３週間後の（比較的）遠い未来の状況に言及することができるのは，絶対的な時間としての「２，３週間後」は遠い未来であっても，妊娠から出産に至るまでの期間全体（およそ９～10ヶ月間）から相対的に眺めれば，基準時（＝発話時）から２，３週間後の状況も近い未来の状況と捉えられるためである（Cf. Yamamoto（2010：78）；Wada（2019：336））。

(36)



次の『ジーニアス英和辞典 第５版』(s.v. ABOUT) の記述についても，同様の説明が可能である。ここでも，結婚に至るまでに要する期間全体（数ヶ月，数年）から相対的に眺めれば，基準時（＝発話時）から少し離れた未来の結婚も近い未来の状況と捉えられるからである。

(37) be going to が遠い未来を表す場合があるのと同じように be about to も少し離れた未来を表すことがある：Bill ***is about to*** get married to his current girlfriend. ビルは今の恋人ともうすぐ結婚する（cf. What ***are*** you

going to be when you grow up? 大きくなったら何になるつもりなの？)。

ところで，(32) や (35) の例には，「相対的近接性」に加え，「心理的近接性」も関係しているように思われる。「心理的近接性」とは，物理的な時間的近接性とは異なり，話し手（書き手）の精神状態（興奮や不安）などにより，未来の状況が差し迫っていると感じることを指して言う。あるインフォーマントは，(35) の例について，次のようにコメントをしているが，このことも「心理的近接性」の存在を裏づけるものである。

(38) I think the context, becoming a father, is both a big, life changing (as you know) event and condition — one that occupies the mind of a father-to-be, thus making the future seem always imminent, always present in his worried mind….

(32) の各例についても，この「心理的近接性」の観点から説明が可能である。「アメリカへ旅立つこと」「街を去ること」自体は遠い未来の状況であっても，話し手にとっては，忙しさからその状況が差し迫っているように感じられていることが看取されるからである（Cf. Wada（2000：407））。

以上の考察から，一般には遠い未来と考えられる未来の状況であっても，相対的な時間の長さや心理的な切迫感によって，その状況が近い未来に生起すると捉えられる場合には，be about to が用いられることがあると結論づけることができる。

7. おわりに

以上，本稿では，従来，周辺的な未来表現とみなされてきた be about to について，適宜，be going to との比較・対照を織り交ぜながら，その意味的特徴を考察してきた。統語的特徴も含めると，本稿での考察は以下のようにまとめられる。

(39) Be about to の統語的特徴：

ⅰ. Be about to の主語として生起する名詞句の種類に関して，統語上の制約は存在しない。

ⅱ. Be about to は be + about to という複数の要素からなる複合的な表現である。

(40) Be about to の意味的特徴：

ⅰ. Be about to は，現在の状況（過去形の場合は過去の状況）が基準時（R）において原形不定詞で表わされる未来の状況（E）の周辺にあることを表わす。

ⅱ. この周辺性（近接性）は，about によってもたらされる意味論的含意である。したがって，be about to は，ふつう，tomorrow や next week などの未来を表わす時の副詞語句とは共起しない。

ⅲ. ただし，about が表わす近接性を強調したり，原形不定詞で表わされる未来の状況の生起時をより正確に示したりするために，近い未来を表わす時の副詞語句が付加されることがある。

ⅳ. また，一般には遠い未来と考えられる未来の状況であっても，相対的な時間の長さや心理的な切迫感によって，その状況が近い未来に生起すると捉えられる場合には，be about to が用いられることがある。

残された課題としては，be about to の典型的な使用場面とそこで生じる語用論的意味を明らかにすることが挙げられる。以下の（41）の例に見るように，be about to には，「注意喚起」（Cf.（41a））や，「誘いの前置き」（Cf.（41b）），「依頼の断りの理由」（Cf.（41c）），「言い訳」（Cf.（41d））など，様々な語用論的意味が認められるからである。

(41) a. Keep your seat belts fastened, everyone — we***'re about to*** land.
（Leech（2004[3]：70））

b. We***'re*** just ***about to*** go and have something to eat. Would you like to join us?
（Carter and McCarthy（2006：671））

c. A: Can you type this letter for me?

B: Sorry, I'***m*** just ***about to*** go home. It'll have to wait until tomorrow. (Hewings (2013[3] : 25))

d. A: Why don't you switch it off and turn it back on again?

B: Yes, I ***was about to*** try that when you came in. (Hewings (2013[3] : 24))

これらの問題については，今後の検討課題とし，その詳細については，稿を改めることにしたい。

引用文献

安藤貞雄 . 2005.『現代英文法講義』東京 : 開拓社 .

安藤貞雄・山田政美編著 . 1995.『研究社 現代英米語用法事典』東京 : 研究社 .

荒木一雄編 . 1984.『英文法用例辞典』東京 : 研究社出版 .

荒木一雄編 . 1986.『英語正誤辞典』東京 : 研究社出版 .

Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.

Carter, R. and M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Close, R. A. 1975. *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.

Comrie, B. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

Declerck, R. 2010. "Future time reference expressed by *be to* in Present-day English," *English Language and Linguistics*, 14.2, 271-291.

江川泰一郎 . 1991[3].『英文法解説―改訂三版―』東京 : 金子書房 .

Heaton, J. B. and N. D. Turton. 1987. *Longman Dictionary of Common Errors*. London: Longman.

Hewings, M. 2013[3]. *Advanced Grammar in Use*. Cambridge: Cambridge University Press.

Höche, S. 2010. "What about *be about*? Walking the tightrope between tense and aspect", *Rice Working Papers in Linguistics*, 2, 52-74.

Hopper, P. J. and E. C. Traugott. 2003[2]. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

石橋幸太郎編 . 1966.『英語語法大事典』東京 : 大修館書店 .
Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.
柏野健次編著 . 2010.『英語語法レファレンス』東京 : 三省堂 .
木塚晴夫・J. Vardman 編 . 1997.『日本人学習者のための米語正誤チェック辞典』Macmillan: Macmillan Language House.
吉良文孝 . 2018.『ことばを彩る 1 テンス・アスペクト』（〈シリーズ〉英文法を解き明かす―現代英語の文法と語法⑤）東京 : 研究社 .
小西友七 . 1976.『英語シノニムの語法』東京 : 研究社出版 .
小西友七編 . 1989.『英語基本形容詞・副詞辞典』東京 : 研究社出版.
Leech, G. 2004[3]. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
Long, R. B. and D. R. Long. 1971. *The System of English Grammar*. Illinois: Scott, Foresman.
中邑光男・山岡憲史・柏野健次編 . 2017.『ジーニアス総合英語』東京 : 大修館書店 .
Perkins, M. R. 1983. *Modal Expressions in English*. New Jersey: Ablex.
Poutsma, H. 1926. *A Grammar of Late Modern English*: *Part II The Parts of Speech, Section II The Verb and the Particles*. Groningen: P. Noordhoff.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
Reichenbach, H. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York: The Free Press.
佐藤健児 . 2014.「進行形の「前段階」性について」日本大学英文学会編『英文学論叢』第62巻 , 99-119.
Strauss, S., P. Feiz and X. Xiang. 2018. *Grammar, Meaning, and Concepts*: *A Discourse-Based Approach to English Grammar*. New York: Routledge.
鈴木英一・安井泉 . 1994.『動詞』（現代の英文法第 8 巻）東京 : 研究社 .
田中茂範 . 2017[2].『表現英文法 増補改訂第 2 版』東京 : コスモピア .
Turton, N. D. 1995. *ABC of Common Grammatical Errors*. London: Macmillan Education.
Wada, N. 2000. "*Be Going To* and *Be About To*: Just Because Doc Brown Was Going To Take Us Back To The Future Does Not Mean That He Was About To Do So," *English Linguistics*, 17.2, 386-416.
Wada, N. 2019. *The Grammar of Future Expressions in English*. Tokyo: Kaitakusha.
渡辺登士編 . 1976.『続・英語語法大事典』東京 : 大修館書店 .
渡辺拓人 . 2009.「*Be about to* の文法化と *go about to* の衰退について」大阪大学大学院言語文化研究科編『言語文化共同研究プロジェクト2008: 言語の歴史的変化と認知の枠組み』69-78.
Watanabe, T. 2010. "Development and Grammaticalization of *Be About To*: An Analysis of *the OED* Quotations," in Imahayashi, O., Y. Nakao. and M. Ogura (eds.) *Aspects of the History of English Language and Literature*: *Selected Papers Read at SHELL 2009, Hiroshima*. Peter Lang.

Westney, P. 1995. *Modals and Periphrastics in English*. Tübingen: Niemeyer.
Yamamoto, G. 2010. “Be about to in English Movies,” 映画英語教育学会編『映画英語教育研究』第15号 , 75-85.

英和・英英辞典

井上永幸・赤野一郎編 . 2019.『ウィズダム英和辞典 第 4 版』東京 : 三省堂 .
小西友七・南出康世編 . 2001.『ジーニアス英和大辞典』東京 : 大修館書店 .
小西友七・安井稔・國廣哲彌・堀内克明編 . 1993.『ランダムハウス英和大辞典 第 2 版』東京 : 小学館 .
高橋作太郎編 . 2012.『リーダーズ英和辞典 第 3 版』東京 : 研究社 .
南出康世編 . 2014.『ジーニアス英和辞典 第 5 版』東京 : 大修館書店 .
八木克正編 . 2004.『ユースプログレッシブ英和辞典』東京 : 小学館 .
Collins COBUILD Advanced Learner’s Dictionary 9th Edition. Glasgow: HarperCollins.［*CALD*[9]］
Collins COBUILD Advanced American English Dictionary 2nd Edition. Glasgow: HarperCollins.［*CAAED*[2]］
Oxford Advanced Learner’s Dictionary 10th Edition. Oxford: Oxford University Press.［*OALD*[10]］

小説

Albom, Mitch. 1997. *Tuesdays with Morrie*. New York: Broadway Books.
Murakami, Haruki. 2019. *Killing Commendatore*. Translated by Philip Gabriel and Ted Goossen. New York: Vintage International.
Murakami Haruki. 2017. *Yesterday*, in *Men Without Women*. Translated by Philip Gabriel and Theodore Goossen. New York: Vintage international.
Murakami, Haruki. 2014. *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage*. Translated by Philip Gabriel. New York: Alfred A. Knopf.
Murakami, Haruki. 2011. *1Q84*. Translated by Jay Rubin and Philip Gabriel. New York: Alfred A. Knopf.
Murakami, Haruki. 2005. *Kafka on the Shore*. Translated by Philip Gabriel. New York: Alfred A. Knopf.
Murakami, Haruki. 2000. *Norwegian Wood*. Translated by Jay Rubin. New York: Vintage International.
Murakami, Haruki. 1998. *The Wind-up Bird Chronicle*. Translated by Jay Rubin. New York: Vintage International.
Murakami, Haruki. 1995. *Dance Dance Dance*. Translated by Alfred Birnbaum. New York: Vintage International.

Murakami, Haruki. 1993. *Hard-Boiled Wonderland and the End of the World*. Translated by Alfred Birnbaum. New York: Vintage International.